夜

空間はバラバラに割れて闇夜の中
私はそのパズルを解こうと焦りつつよろけ歩く

蒼白な額に滲む冷や汗と、そして湿った咳が
とげとげしいビルの角と、鋭くそびえる直線に
責め苛まれ、息を詰まらすほどに次々とこみ上げる

襟首をつかみ、引き寄せようとするあの手が
乾いた北風に凍死したアスファルトより伸び
背をかすめるたび、悪寒が私の中に新たな熱を生む

谷間から見上げるオリオンは速度を増して回り始め
神秘であるだけの冷徹な瞬きを地に送るのみ
ああ、天は高く、地はますますに近くなる
ああ、黒いアスファルトがぶつかってくる

＊

片頬には鈍痛、片頬には切るような風の笞
身体の表にはアスファルトの冷たい胸がぴたり寄り添い
浦には冷気が、死人に被せられる布のように置かれている

このままこうしていれば全ては終り、石となれる
だが、僕の目を覚まさせたものは？
駄目だ、立ち上がれ。僕の目を覚まさせたものは？

見回しても何も変ってはいない、誰もいない
星は冷たく瞬き、ビルは高く、風は舞う
何も変ってはいない。だが、僕の目を覚まさせたものは？
何も変ってはいない、何も、そしてこれからも———

これだ、常に全てに横たわっていたものは
そして、僕の目を覚まさせたものは
そうだ、立ち上がれ

(1982.12.11)